

【名古屋城天守閣を木造復元し、旧町名を復活する有志の会 72回例会】

2018・2・24

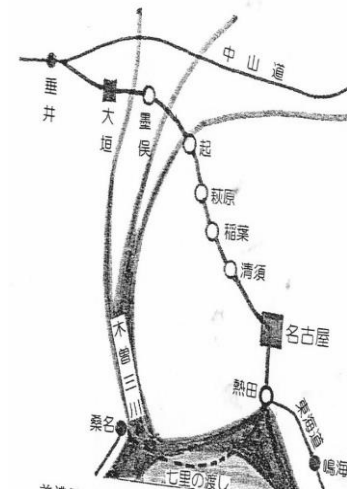
朝鮮通信使と名古屋 ―江戸時代の善隣交流―

堀崎嘉明

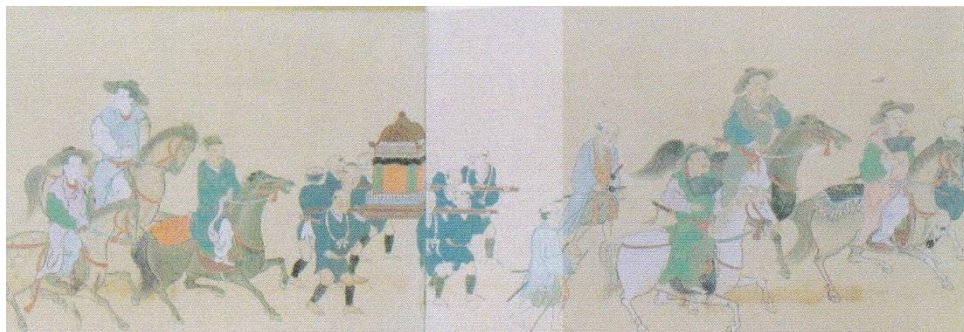
1、朝鮮通信使のこと、ご存知ですか？！

2、朝鮮通信使がやってきた―名古屋城下の情景

【美濃路】



海を渡る使節船(「祭礼幕」丹羽郡多加木村、一宮市博物館蔵)



李王国書を運ぶ使節団(「朝鮮通信使絵巻屏風仕立図」崇覚寺蔵)

1 通信使のことご存知ですか？！

昨秋、朝鮮通信使の記録がユネスコの記憶遺産への登録が決まった。

全333点のうち名古屋からは蓬左文庫の4点が含まれ、各報道機関はこぞって紹介した。この間5年間にわたって日韓両国の関係機関で共同調査がなされ、両者の見解の相違を乗り越えて「誠信の交わり」の精神で共同申請を成し遂げることができた成果で、「善隣交流」のあり方を考察する上での意義は大きいものがある。しかしその実像についてはあまり知られていないのが実情である。

今回は表題をテーマにその実像の一端を探ってみたい。

《なぜ派遣されたのか？！》

通信使*1は慶長12年(1607)、徳川家康の要請で始まった。当初より全方位外交*2で国際化政策をとり、特に朝鮮王朝とは国交を結び、東アジア世界での孤立解消を目指す優れた国際感覚*3をみせた。先の「壬辰・丁酉倭乱」後10年、初来日の正使呂祐吉以下500名は決死の覚悟で臨んだ。以後3回は回答兼刷還使といい、「日本将軍の復交を要請する書簡への回答(国書伝達)と前戦争の「被虜の送還*4」が派遣目的であった。

- *1 通信使とは「信(よしみ)を交わす使節。室町時代に倭寇対策をもとめ5回派遣。
- *2 イギリス、オランダとイスパニア、ポルトガルとは交流継続。
- *3 「異国のうち朝鮮は隣国であり、善隣が道理である。朝鮮に明朝と共同して復讐の拳があれば、幕府は苦境に立つし、和好を結べば、幕府の権威は異国にも達し、かつ国内諸侯の統制にも益するようになる」(雨森芳洲『隣交始末物語』)と述べたという。
- *4 「焼き物戦争」ともいわれ、李参平ら陶工、民間人の6万人ほどを連行。本国帰還者は5,6千人。大半は日本の歴史に身を置き、生きることとなった。乃木希典、東郷茂徳(アジア太平洋戦争、開・終戦時の外相)なども後裔の人。

2 朝鮮通信使がやってきた名古屋城下の情景

(1) 1回少ない名古屋城下来訪

朝鮮通信使の尾張への往来は10回である。そのうち名古屋へは9回で1回少ない。というのも初回通過時の慶長十二年(1607)には名古屋城下はまだ存在せず、清須に來訪している。その時使節の記録には「城を重ね、郭を畳ね、海水を引いて濠となし船が通行でき、民家の繁盛と人の多いことは関東の巨鎮*1である」(『海槎録』)と紹介されている。

その壮大な清須城下が姿を消すのはこの直後で、徳川家康が慶長十四年(1609)に義直を伴って清須を訪れ、名古屋築城を決めたからである。江戸幕府の普請役は、1603年以降江戸市街、彦根、禁裏、江戸城、駿府、篠山、丹

波亀山城と徳川領国の基盤強化と大坂城を包囲する形で連続しており、なかでも名古屋築城は大坂と西国外様大名を意識した「西征後方の兵站地、西方勢力東侵の前線防御地」を目指すものであった。(拙稿「幕藩制成立期における城普請について」『日本近世史論叢』)そのため城関係の造作工事は突貫作業となったばかりか、城下を急ぎ生むべく清須の町ぐるみ移転《清須越》*2も実施された。

*1 当時の清須城下には多数の侍屋敷、商人、職人町のほか100ヶ寺を超す寺院があり、人口も6~7万に上ったという。近年の発掘調査で当時の城下の様子が復元され、その確かさからこの筆も活用されている。

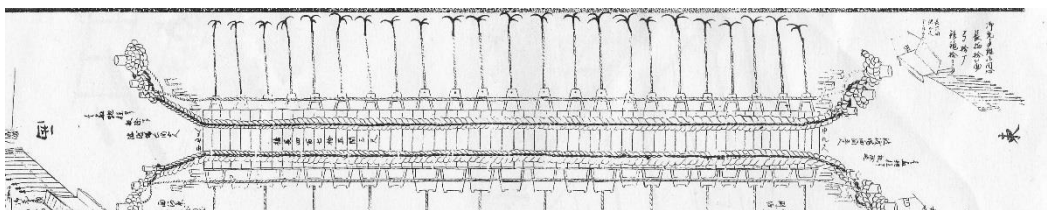
*2 名古屋城下の「清須越し」の町は67と言われ、多くは当時の町名を踏襲した。なお加藤富久氏の詳細な貴例会(2014・6)報告がある。

(2)城下で待ち受ける人びと

1、美濃路西口では

大垣を立った使節団は美濃路を通行、起川(木曽川)などの船橋*1を渡って尾張に入る。

毎回これら渡河時の印象は強烈で全使行録に「第一の壮観」と記されている。起宿での昼食、稲葉*2・清須宿を経て名古屋城下に入る。大垣からの旅程は10里余で、途中枇杷島橋に差し掛かる頃には日は落ち闇夜となる。城下を前に道の両脇の家々では「燈火を掲げ、真昼のような明るさ」(『東槎日録』)での歓迎、城下西の榎町から南は大久保見までは町普請で家々は白壁に塗り変えられ(『正事記』)るなど、使節の歓迎準備が名古屋城下の町造りが軌道に乗る寛永期頃から18世紀にかけて町民ぐるみでなされた。「船橋の図」(個人蔵)



*1 尾張藩は2ヶ年前から設営着手、接待費用は領地石高の70%、架橋は13万石余と30%を占めた。起川船橋は川両岸の間に大船44艘、小船230艘、合計274艘で約860mの規模であった。

*2 禅源寺(稲沢市)にはゆかりの扁額もあり、本堂で見学もできる。



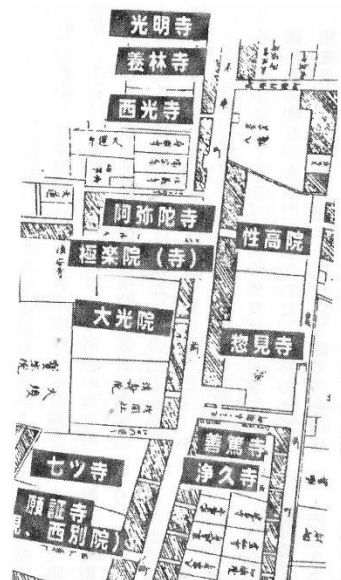
2、巾下や南寺町では

正徳元年(1711)、家宣將軍襲職を祝賀する朝鮮使節は美濃路西入口の巾下を五条橋に向かっていった。その折りに待ち受けていたのが尾張藩士朝日文左衛門の娘こん達で、恐らく父から使節の来名情報を得ていたのであろう。この機会*1の見物をと約4里も離れた瀬戸から名古屋城下の実家に泊まり、十月五日の辰半刻(8時過ぎ)に母らと出かけていた。

長い待機の後にはやって来た通信使行列、こん達がこの時に見たものではないが寛永<十三年>度使節通行時の模様をオランダ商館長ニコラス・クーケバッケルの筆が紹介している*2。こん達には昼過ぎから延々と目の前の異国人行列を見物し、帰宅は子の刻(午前零時)頃となった。

その後、本町通りを経た正使趙泰億以下約370名は宿舍の南寺町へ到着した。周辺は「終日、御祭礼の如し」と歓迎の諸準備でこった返しており、そんな中「性高院へ戌八刻(午後10時)三使が到着。正使門に入るとき、鉄砲を放つ。三使の入る度に音楽あり。予親しく見学*3」と礼砲や音楽が響き渡る中を宿舍に次々と到着する模様を知ることができる。

一泊とはいえ使節団や案内役の対馬藩など随行人数は合計で2,000人を越す。宿場町ではない名古屋城下にこれらを受け入れる宿泊施設はなく、城下南の大須門前町の寺院や町屋が当てられた*4。



*1 江戸時代に異国人と出会えるのは朝鮮通信使や琉球使節、オランダ商館長の江戸参府時のみで、明暦年間以降の朝鮮使節の来日は間隔が開き、生涯2度と無いものになって来た。

*2 「先ず舞踊や笛、太鼓の奏樂が行われ、二人宛通りの両側を進み、金と生糸をより合わせた綱を手を持った三人が警固していた。……。この後に五、六十人にかつがれ、赤いピロードをはった駕籠が続いた。中の卓子の上には漆塗りの箱、朝鮮文字で書かれた日本皇帝への書簡が入っていた。……。あらゆる種類の楽器の奏樂が来た。騎馬の若者、この後に駕籠、使節の副官が……。そして約四百人の騎士、約二百人の日本皇帝の護衛、日本の貴族、最後に朝鮮人の荷物と賜り物を運ぶ駄馬が約千頭、行列が通り過ぎるのに約五時間かった。」

*3 朝鮮通信使には諸大名や儒者などが書画・額の揮毫を依頼した。幕府は交流制限令を出したが、文左衛門は一行の食事が終わるや長い廊下を行き来して「海峯、竹里という絵かきから予も文字ならびに絵書いてもらふ。」と念願の書と絵をせしめることに成功、獲物にご満悦、自慢気であった。なおこの項については、貴例会で

の千田龍彦氏による報告「朝日文左衛門が見た朝鮮通信使」(26回)、「こんの物語」(39回)参照。

- * 4 正徳度使節の三使(正使[外務省局長級]・副使・従事官)は性高院、対馬藩主宗氏は近くの惣見寺、中官は大光院へ分宿、尾張藩士の徹夜の警備が厳重になされた。

(3)通行を支えた人びと

2,000人余の移動と使節団。その送迎や接待、警固などは日本側が負担、幕府から馳走役を命じられた諸大名が担った。尾張藩は一行の荷物運搬や通信使乗馬を往路は名古屋から吉田(現、豊橋市)まで、帰路は吉田から大垣までを分担、起・鳴海両宿の昼食や名古屋泊の取り回しに当たった。これらの作業は莫大で、藩士の力のみならず藩命を受けた領民*1の協力なしには不可能であった。

- * 1 例えば「往復時合計 寄人足 8,200人余、寄馬 2,050疋余」(正徳度)は、尾張藩の命令で領民が担い「村単位での動員率は98%であった。」 また起宿へ肴持参、名古屋へ魚御用の「さごし」などの料理用魚のため横須賀村他2ヶ村の漁師が8月初旬から10月に17日間、延べ3,400人が昼夜の出漁をした。

(4)知らされた使節情報

当時、通信使の来日情報は「触れ」により名古屋城下の町人にも知らされた。一例をあげると「庇の上を掃除すること」、「孫庇は取り外すこと」などと事細かな注意事項が「茶屋町」から城西の枇杷島村にまで出されている。また朝鮮使節の接近情報を受けて緊張と関心が高まりを見せた前日、「朝鮮人、明七日いよいよ名古屋到着いたし候」と使節到着報と見物の許しと応接奨励も伝えられた。こうして朝鮮通信使の来日情報は藩関係者だけでなく名古屋城下の人びとにも広く知らされ、使節団の来名を心待ちにする気運を高めた。

(5)祭りに取り入れられた通信使

使節団の初めての名古屋城下訪問は寛永元年(1624)で、その後の宝暦十四年(1764)にかけて9回に及んだ。前半は間隔がほぼ10年と短く、建設間もない城下人の脳裏に清道旗を先頭に数十人の楽隊が氣勢を上げ、異国情緒溢れる衣装を纏って進む姿や印象が鮮やかに刻まれたものと思われる。



その時は家康三回忌を機に始まった祭礼（戦前は「名古屋祭」）が城下最大の行事に発展する時で、繁栄期の寛永年間以降に桑名・本町などの山車や35町からの警固行列が仕立てられ6、000人を越す、町人が中心の本町・末広町を練り歩くなど大きな盛り上がりを見せた。

ここで注目したいのは、城下の各町*1が行列への趣向を競い合い、朝鮮使節風の衣装を纏った「唐人行列」や「唐子遊び山車」などを登場させる粋な演出*2で東照宮際に異国風な彩りを見せたことである。

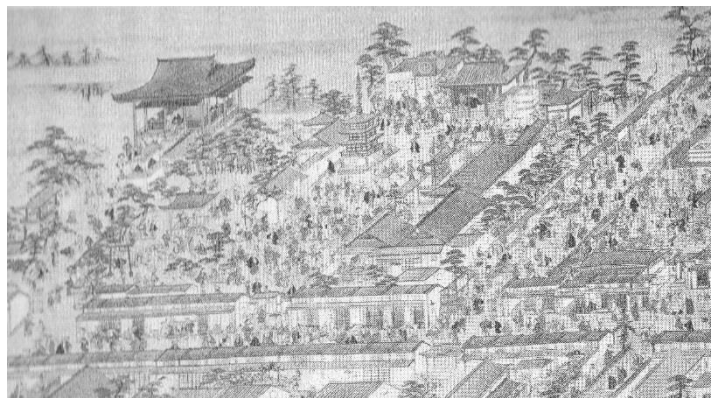
*1 唐人行列などが取り入れられた始期についての典拠には大和町（17世紀半、『名古屋東照宮祭礼図屏風』）、茶屋・両替町（慶安二年、『尾張徇行記』）、上七間町（享保十八年、『尾陽雜記』）、関鍛冶屋町・桶屋町（明和二年、『尾張年中行事絵抄』）、伏見・淀町（宝暦十三年、『張州雜誌』）、嶋田町（天保年間、『尾張名所図会』）がある。

*2 唐人行列への影響について、尾張藩士の絵師・高力種信（猿猴庵）が「大和町・茶屋町のどんどんちゃんは朝鮮人來朝の時、宿入りの樂をうつせりぞ。」（下線筆者記入）とする興味深い詞書（『尾張年中行事絵抄』）を残している。

なお唐人行列に当たり茶屋町の呉服商伊藤家ではその衣装には上物を用意するよう配慮したという。清水禎子氏は「その狙いは【神君様】への奉納する【心組】であることと同時に店の風聞をも考慮にいれていたと考えられる。」と指摘している（「名古屋東照宮祭における町人及び藩主の対応」）。

(6)尾張藩・名古屋の印象

「容姿のすぐれていることも、沿路随一である。わけても女の人が、皆とびぬけて美しい。」（『日東壯遊歌』平凡社）とは、宝暦度使節金仁謙による名古屋到着時の印象である。また濃尾平野の生産力の高さに目を見張り、「民家、四万戸になんなん雄盛」や「五層の楼閣、西方に大橋、下を船が通っていた」と尾張藩62万石の城下町名古屋を大坂や京都と比較する記述、名古屋城下の町筋、生活ぶり*1に注目している。特に申維翰の「その十字街の黄金の屋、百貨の肆（みせ）は、種々の奇観をなし、これを望めば眼もまばゆいばかりである。」（『海游録』）と盛時を迎えた城下の繁栄の模様を秀逸な筆で綴っている。



*1 「頭は白く、袴（男子）、裙（女子の下着）を着用した者がなく、長い着物だけ着ていた。男女が別無く同じ親族間でも結婚、顔はたとえ人間でもその行動は犬・豚の

如し。」(洪禹載『東槎録』)もそうした観察眼がみられる。

(7)饗応の宴

使節への饗応は深夜十二時近くから性高院へ対馬藩主、以酌院両僧が赴いて執り行われ、供された七五三膳*1を前に三使など六名は互いに日本語を交わすなど和気あいあいの雰囲気の中、尾張藩の成瀬・竹腰両家老らの応接で催された。こうしたもてなしは初期の段階から行われ、その後では江戸への往路宿泊地で三使に七五三引替膳、昼休憩地で五五三膳の宴席が設けられ、御馳走人の大名(十萬石以上)の負担で実施された。しかし負担が莫大なため、正徳度では待遇経費節約のため新井白石の改革によって往路で赤間関、大坂、京都、名古屋、駿府、復路は駿府、名古屋、京都、大坂、牛窓の五所路宴に縮減した。重要地の尾張藩は例外で、これまで通り三使・上々官に七五三引替膳が用意された。

- *1 尾張藩だけは起・鳴海(九股半)・名古屋(十八股)で鹿肉が供された。正徳度の鹿肉確保では朝日の「日記」に尾張領内の鹿が生息するエビツル山(尾張旭市)などに約4,000人の勢子を総動員、13頭の鹿を網棚に追い込んで生け捕る様子が記されている。延享度使節の料理食材には日間賀島から鯛(509枚)、篠島からは鯛(75枚)、七五三膳用の鮑(400盃)、さざえ(660個)、海老(760尾)が献上された。

(8)三世唱和一詩文応酬

名古屋城下での詩文応酬のハイライトは、松平君山*1(68歳)、子霍山(46歳)、孫南山(20歳)が宝暦度使節の南玉(秋月、43歳)らと行った「三世唱和」*2で、最近では朝鮮通信使を扱うほとんどの書物で紹介されている。それは『尾張名所図会』の挿絵(右絵)にもなり、右には君山、子霍山、孫南山らが列座、左には南秋月らが居並んで描かれている。



- *1 君山と秋月と交わされた詩文を紹介してみよう。

製述官南秋月に呈す

路扶桑に入りて東又東

画態夜宿す三山の月

野館花開き匹馬を停む

行吟ここを去りて応に首を回らすべし

君山

海天万里使星通ず

彩鷁朝に飛ぶ五雨の風

舟梁雲起り飛虹渡る

八葉の芙蓉積雪の中

源君山に酬し奉る
性院深々稲葉の東
山川秀媚天新たに雨ふる
春早江城去雁を聞く
蓬萊仙老厖眉皓し

秋月
万松村逕遠く相通ず
楼観高低夜風有り
日暄橋渡りて垂虹を過ぐ
三世論交す一席の中

＊2 この上ない栄誉な檜舞台で、南秋月も「三世一席、各瓊篇を贈る希代の珍なり」と讃え、君山も「ああこの言をもって不朽^{ふきゅう}の栄となすべき也」と喜びを表したという。

(9)名古屋に残る使節の遺産

名古屋に残されているユネスコ記憶遺産は名古屋市蓬左文庫の「朝鮮人物旗仗輜輿之図」(文化度通信使の衣装・旗・輿なども解説記録)、「朝鮮人御饗応七五三膳部之図」(文化度使節饗応用の七五膳の見本)、「朝鮮国三使口占聯句」(天和度使節への尾張徳川家のもてなしに朝鮮使節が感謝した漢詩)、「甲申韓人来聘記事」(宝暦度使節を出迎えた時の松平君山の記録)の4点(日本側登録対象は全48件)が含まれている。ほかに同文庫には多くの関係文化財が収蔵、「豊かなる朝鮮王朝の文化～交流の遺産展」(日韓国交正常化50周年記念2015年)で披露された。

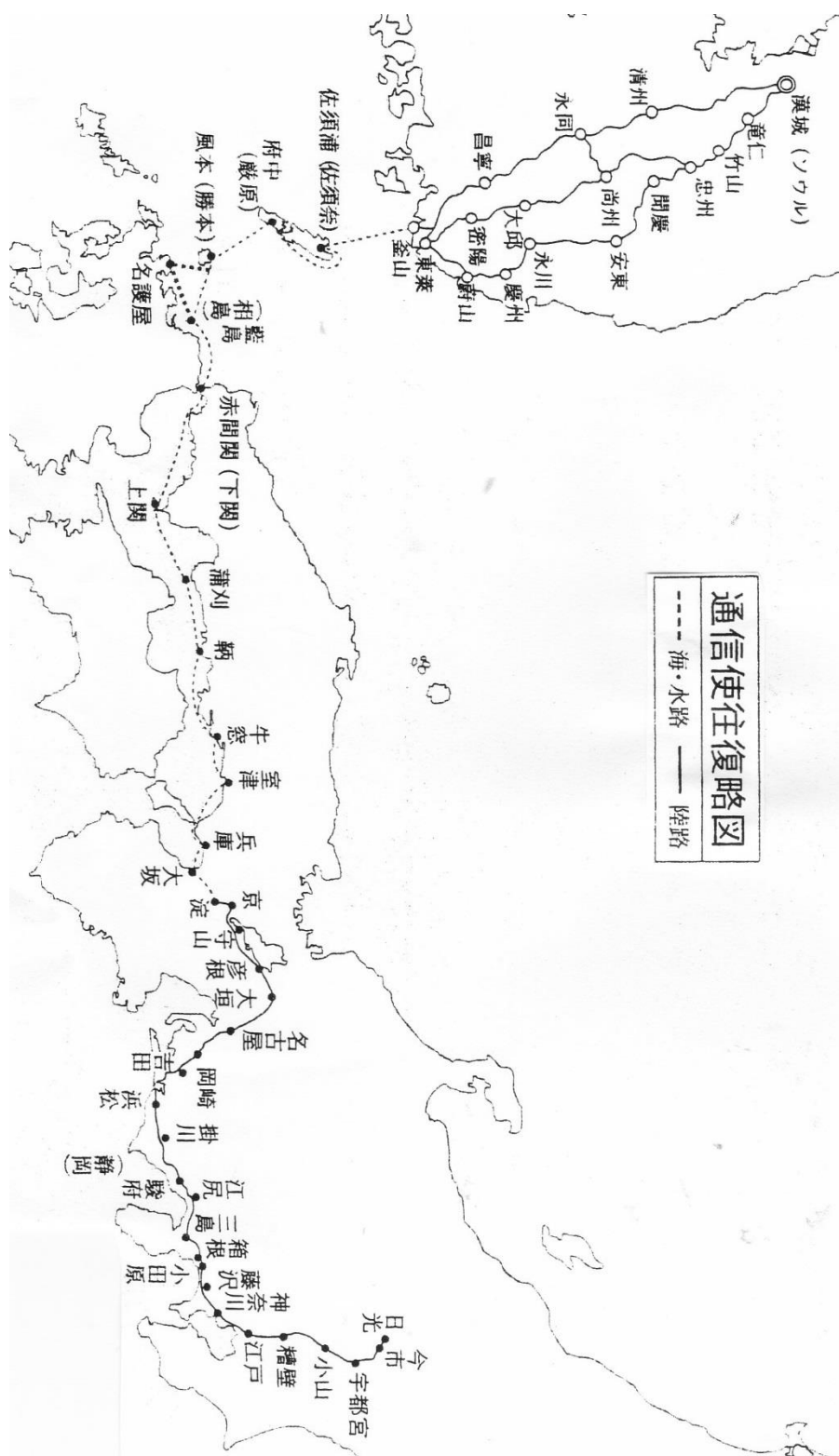


その他「韓使来聘図」(八事興正寺)、「朝鮮通信使絵巻屏風仕立図」(崇覚寺)、「金善臣の遺墨一五言詩一」(名古屋別院)がある。

9 江戸時代の朝鮮使節一覧表

西暦	朝鮮	日本	正使	副使	從事官	使命	総人員 (大阪留)
一六〇七	宣祖四〇	慶長一二	呂祐吉	慶暹	丁好寛	回客兼副還 修好	五〇四 [京都留]
一六一七	光海君九	元和三	吳允謙	朴梓	李景稷	回客兼副還 大阪平定祝賀	四二八 [七八]
一六二四	仁祖二	寛永元	鄭 豈	姜弘重	辛啓来	回客兼副還 家光襲職	四六〇 [一四]
一六三六	仁祖一四	寛永一三	任 統	金世濂	黄 辰	回客兼副還 泰平之賀	四七八 [不明]
一六四三	仁祖二一	寛永二〇	尹順之	趙 綱	申 濡	家網誕生	四七七 [不明]
一六五五	孝宗 六	明暦 元	趙 珩	愈 瑒	南龍翼	家網襲職	四八五 [一〇〇]
一六八二	肅宗 八	天和二	尹趾元	李彦綱	朴慶後	綱吉襲職	四七三 [一三]
一七一〇	肅宗三七	正徳 元	趙泰億	任守幹	李邦彦	家宣襲職	五〇〇 [二九]
一七一九	肅宗四五	享保 四	洪致中	黄 璫	李明彦	吉宗襲職	四七五 [二九]
一七四八	英祖二四	延享 元	洪啓禧	南泰耆	曹命采	家重襲職	四七五 [一〇九]
一七六四	英祖四〇	宝暦一四	趙 曦	李仁培	金相翊	家治襲職	四七七 [一〇]
一八一二	純祖二一	文化 八	金履喬	金勉求		家齊襲職	三二八

(仲尾 宏『朝鮮通信使をよみなおす』より)



(三宅英利『近世の日本と朝鮮』より)

